2024 年 1 月 24 日

レポート

魅力ある高校づくり（高校魅力化）の卒業後の波及効果について

～高校卒業後の若者に対するアンケート調査より～

公共経営・地域政策部 [東京] 副主任研究員 永野 恵

【要　旨】

■高校魅力化の卒業後の影響を分析するために、高校を卒業した若者に対するアンケート調査を実施

○ 本レポートは、高校在学中に魅力ある高校づくり（高校魅力化）に関わるさまざまな活動・体験をした若者の、卒業後の進路選択、資質・能力認識、地域（地元）に関する意識の在り方等を把握するため、インターネットモニター調査を行い、その結果を分析したものである。

■本人の意志ある進路選択にポジティブな影響

○ 高校時代に「高校魅力化」に関わる豊かな学習活動・学習環境を経験した者は、卒業後の将来の見通し（「将来こういう風でありたい」を持っている、将来に向けて大切だと思うことを実行している）についてもポジティブな意識を持っていることが分かった。

○ 高校卒業後の進路選択に関して、進学先（大学等）の選択においては高校時代の経験に関わらず「学力が合っていること」が主要な判断材料となっているものの、就職先に関しては、高校時代に豊かな学習活動・学習環境を経験した者は、「社会的貢献ができる」「自分の関心のある社会課題解決に関われる」等を理由に選択する割合が高まることが分かった。

■地方創生効果（地域への意識の高まり、関係人口の創出等）にポジティブな影響

○ 高校時代に豊かな学習活動・学習環境を経験した者は、「いずれは高校時代を過ごした地域で働きたい」「地元に帰らなくても何らかの形で貢献するような仕事をしたい」「地元に帰らなくても何らかの形で繋がり続けたい」といった地域への意識が高い他、「今住んでいる地域で、地域行事やボランティア活動等に参加している」と回答する割合も高く、現在住む地域における活動も活発である傾向があった。

○ また、高校時代に地域資源や地域の大人に触れる機会が多かった若者は、卒業後の帰省回数が多い他、地元に関する活動（ふるさと納税、地元の地域行事への参加等）も活発に行っており、卒業後も地元に愛着を持ち続けていることが伺えた。

■本分析における留意点

○ 本分析における「地方創生効果」とは「地元に貢献する仕事への意識」や「地元に繋がり続けたいという意識」を指しており、実際の UJ ターン人口のインパクトについては分析できていない点には留意が必要である。

○ また、同様に「地方創生効果（地元への意識）」や「帰省回数」については地元と現在の居住地の近接性にも依存すると考えられ、この影響を排除するためには別途詳細のデータ分析が必要である。

ご利用に際してのご留意事項を最後に記載していますので、ご参照ください。
（お問い合わせ）コーポレート・コミュニケーション室　E-mail：info@murc.jp

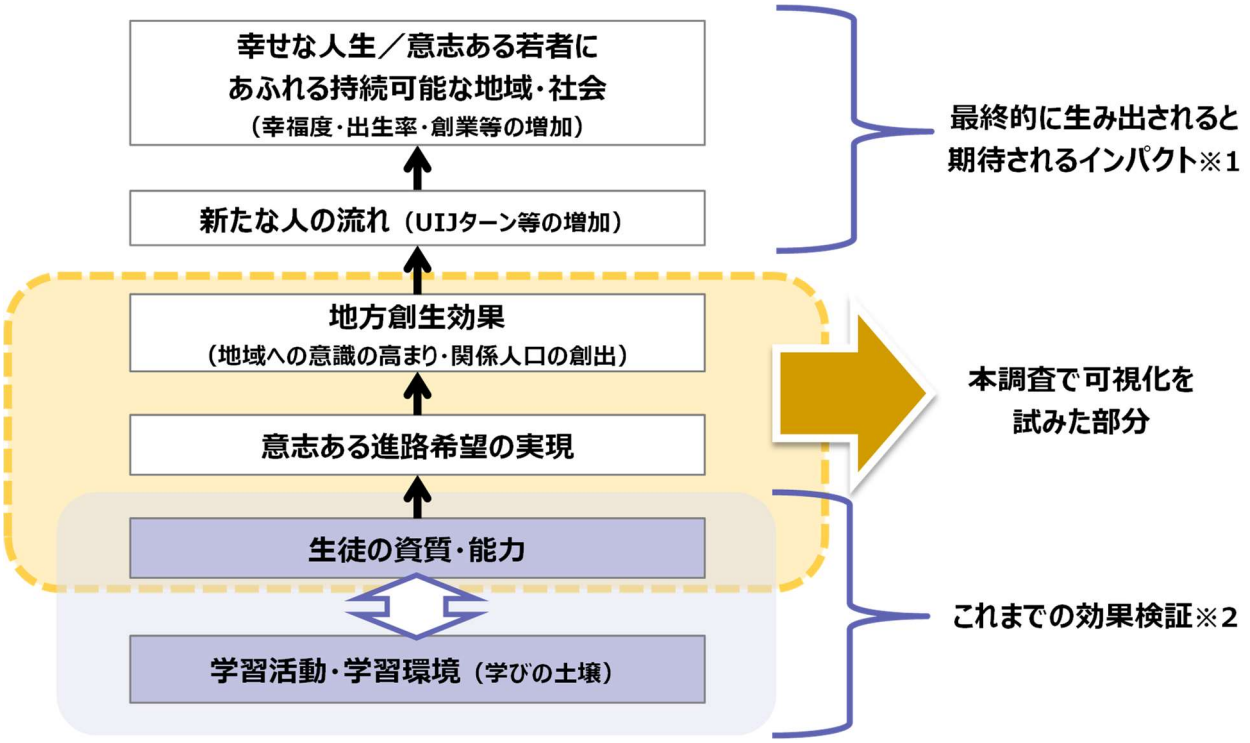
1. はじめに・調査目的

各地域で、地域と高校との連携による魅力ある高校づくり（高校魅力化）を進める目的には、生徒の資質・能力を伸ばすことはもちろん、意志ある進路希望の実現、卒業後の各地域の関係人口増加、意志ある若者の増加による持続可能な地域社会の実現など、さまざまな期待が含まれている。またこれらは、高校在学中の 3 年間で完結するものではなく、中長期的に現れる成果を多く含んでいる。

一方で、これまで行われてきた「高校魅力化」に関する効果検証は、在校生に対する調査（在校中の生徒の資質・能力や地域への愛着の伸びの把握）が中心であり、彼らの卒業後の意識・活動の様子などは捉えることができていない。

そこで本調査では、高校在学中に「高校魅力化」に関わるさまざまな活動・体験をした若者が、その後どのように進路選択を行い、どのような資質・能力を有し、そしてどのような意識や活動に繋がっているのかを把握するため、インターネットモニター調査を行った。

図表 1 本調査の構造について



出所）当社作成
※1）別途統計分析・経済分析等が必要となるため、本調査の対象には含めていない。
※2）以下の当社政策研究レポートも参照。
①「魅力ある高校づくり（高校魅力化）」をいかに評価するか～「高校魅力化評価システム」の開発を事例として～（https://www.murc.jp/library/report/seiken_191122_3/）
②学校での「高校魅力化評価システム」活用事例レポート～エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り（EDPM）に向けて～（https://www.murc.jp/library/report/seiken_220310_3/）
③高校生の資質・能力を高める「学びの土壌」～島根県「高校魅力化評価システム」データ分析レポート～（https://www.murc.jp/library/report/seiken_220310_2/）

2. 調査の概要

調査の概要は以下の通りである。

図表 2 調査の概要

1. 実施方法
   - インターネットモニター調査
2. 調査期間
   - 2022 年 12 月 21 日(水)～2022 年 12 月 27 日(火)
3. 調査対象
   - 高校を卒業した 18 歳～25 歳の若者
4. 調査方針
   - 高校を卒業した若者に対し、次表の 5 カテゴリについて聴取し、高校時代の高校魅力化の取り組みが、その後の進路選択、意思や行動にどのような影響を与えているのかを分析する

図表 3 調査項目

カテゴリ	詳細項目	備考
自身について	・年齢、性別 ・現在の社会的立場、最終学歴 ・通っていた高校の所在地、高校の設置者 ・通っていた高校の課程・学科　等	・回答者の通っていた高校の所在地が、学校基本調査における高校生の地域別分布とおおむね同様の分布となるよう、割付を行った。
意志ある進路選択	・自分の将来についての見通しを持っているか ・高校卒業後の進路選択の理由 ・現在の職業選択の理由　等	―
地方創生効果（地域への意識、関係人口）	・地域への意識（地元に繋がり続けたいか　等） ・地域行事やボランティアへの参加状況 ・帰省回数 ・直近 1～2 年で地元に関して行ったこと　等	・現在地元を離れて暮らしている人に聴取。
資質・能力 Well-being	・自己肯定感 ・主体性・協働性・探究性・社会性に関わる意識 ・Well-being に関わる意識　等	・「高校魅力化評価システム」における、自己認識指標の中から、卒業後の若者において特に重視したい指標を抜粋。
高校における学習歴	・主体性・協働性・探究性・社会性に関わる学習活動 ・主体性・協働性・探究性・社会性に関わる学習環境（学びの土壌）	・「高校魅力化評価システム」の学習活動および学習環境指標の中から、特に生徒の資質・能力に影響のあると思われる指標を抜粋。

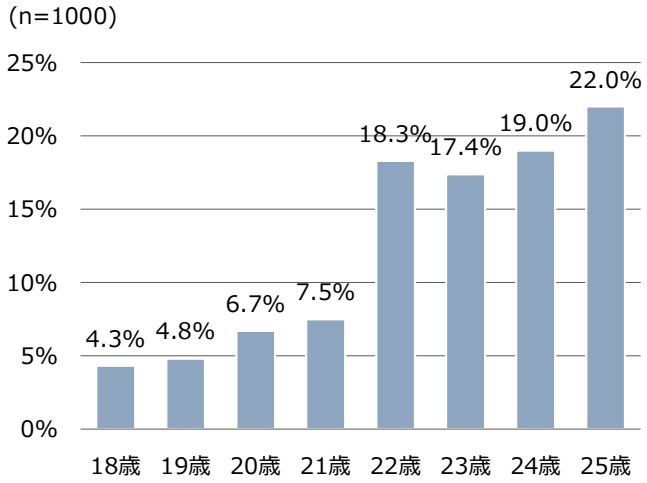
※1）当社では、一般財団法人　地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、地域と高校との連携による、魅力ある高校づくり（高校魅力化）が、そこで学ぶ生徒に与える効果を定量的に可視化するための仕組みである「高校魅力化評価システム」を開発した。同システムは、生徒および大人に対するアンケート調査より構成されており、「生徒の学習活動」「地域の学習環境」「生徒の能力認識」等の要素について、これからの社会で求められる「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の 4 つの視点を軸に指標構成されている。同システムの詳細については、前項に記載した当社政策研究レポート①も参照のこと。
※2）本調査における「地元」とは、「通っていた高校の所在地」を指す。
※3）以降のグラフについて、「SA＝単一回答」「MA＝複数回答」「NA＝数値回答」を示す。
※4）グラフのパーセンテージは四捨五入しているため、足し合わせた際に 100%とならない場合がある。

3. 調査結果

(1) 回答者属性

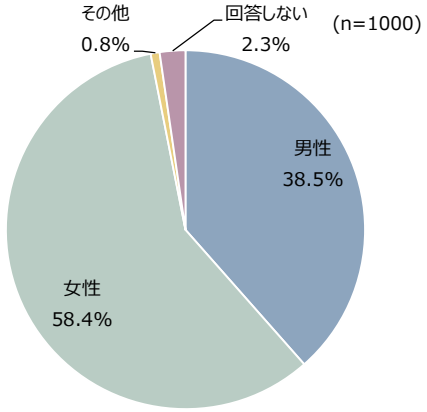
① 年齢

図表 4 年齢(NA)



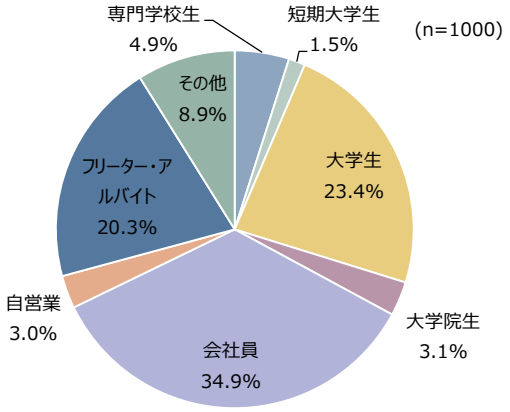
② 性別

図表 5 性別(SA)



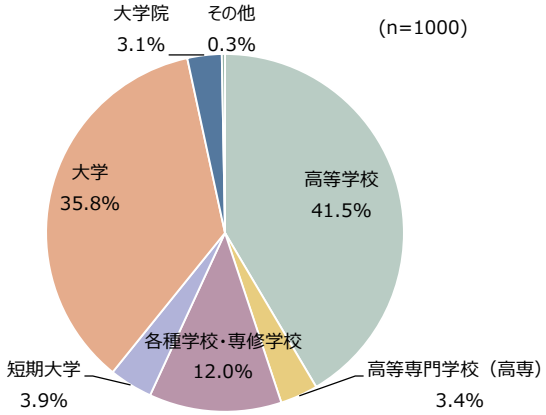
③ 現在の社会的属性

図表 6 現在の社会的属性(SA)



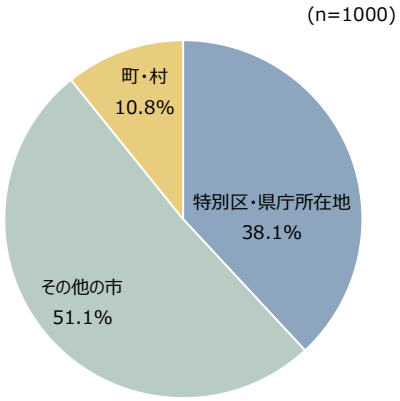
④ 最終学歴

図表 7 最終学歴(SA)



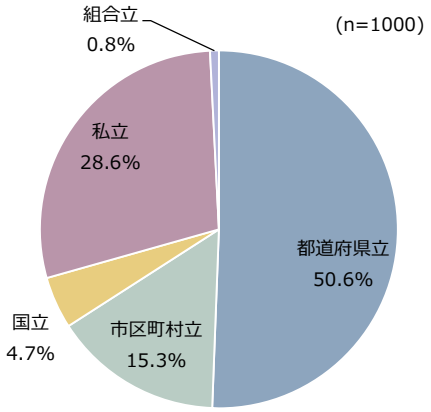
⑤ 通っていた高校の所在地

図表 8 通っていた高校の所在地(SA)



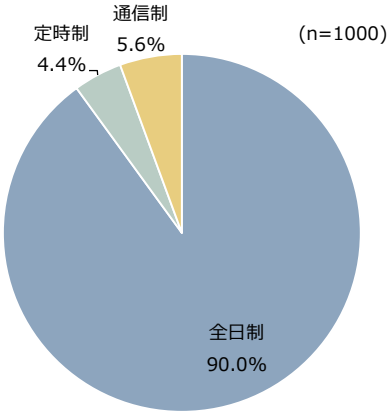
⑥ 通っていた高校の設置者

図表 9 高校の設置者(SA)



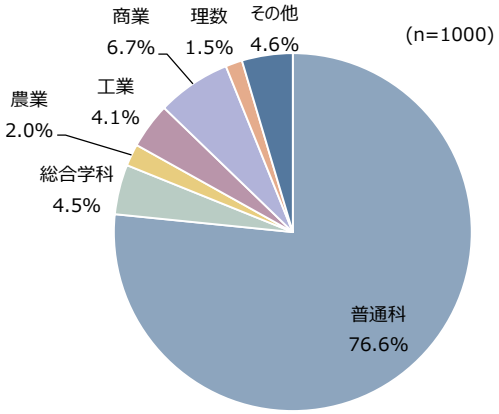
⑦　卒業した高校の課程

図表 10 高校の課程（SA）



⑧　卒業した高校の学科

図表 11 高校の学科（SA）



(2) 高校時代の活動等の意志ある進路選択への波及効果

① 将来についての見通し

高校時代の学習履歴が卒業後の将来への見通し意識にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境(学びの土壌)に関する回答内容と、将来の見通し意識に関する回答内容とのクロス集計を行った。

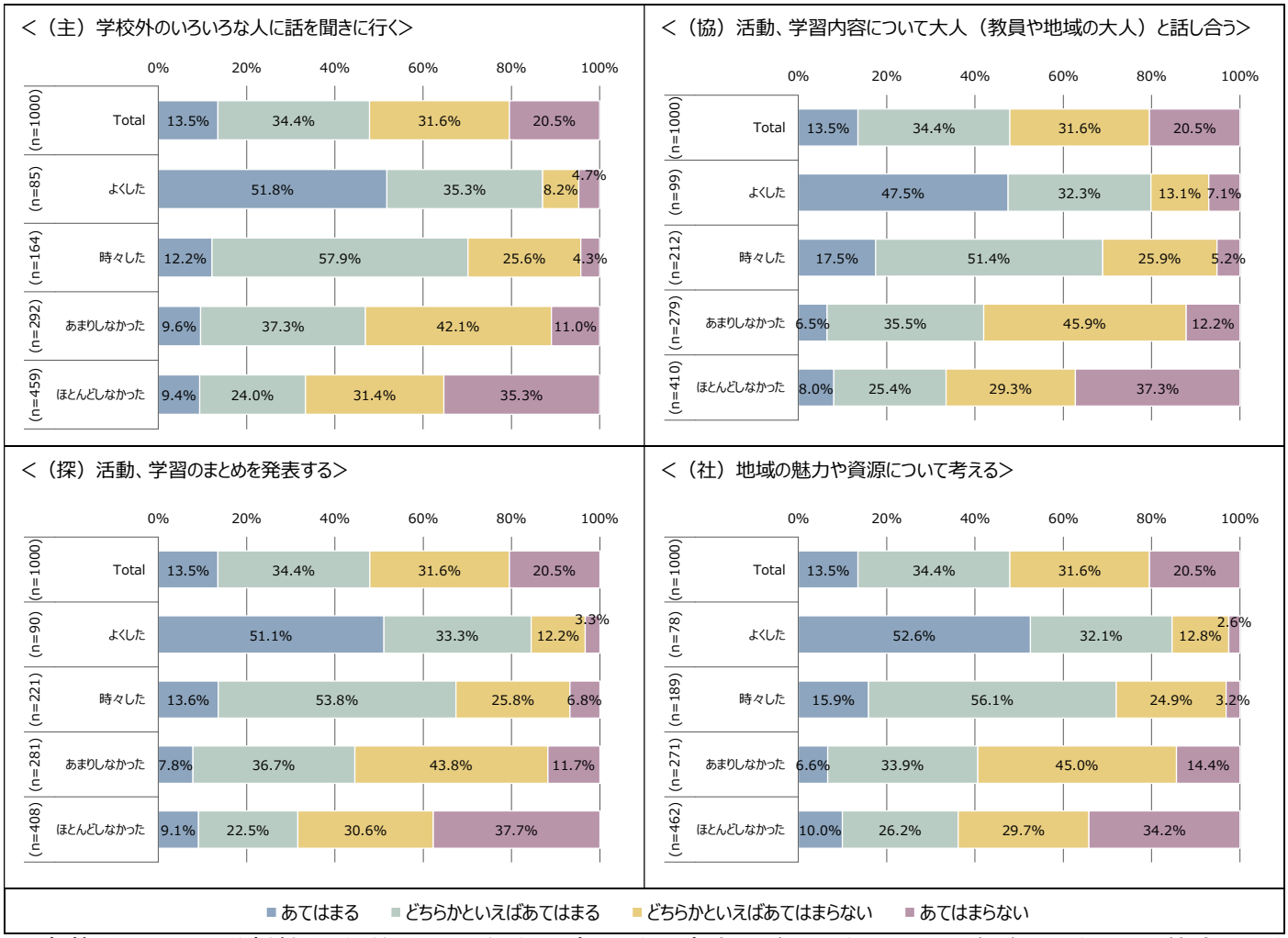
図表 12 クロス集計の内容(将来についての見通し)

分析対象:自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っている(SA、4 件法)	
分析軸:高校時代の学習活動・学習環境(SA、4 件法)※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる 4 つの指標を設定	

※)4 件法=あてはまる、どちらかといえばあてはまる、どちらかといえばあてはまらない、あてはまらない等、肯定的回答～否定的回答を 4 段階に分け、最も自分の気持ちに近いものを選んでもらう回答方式。

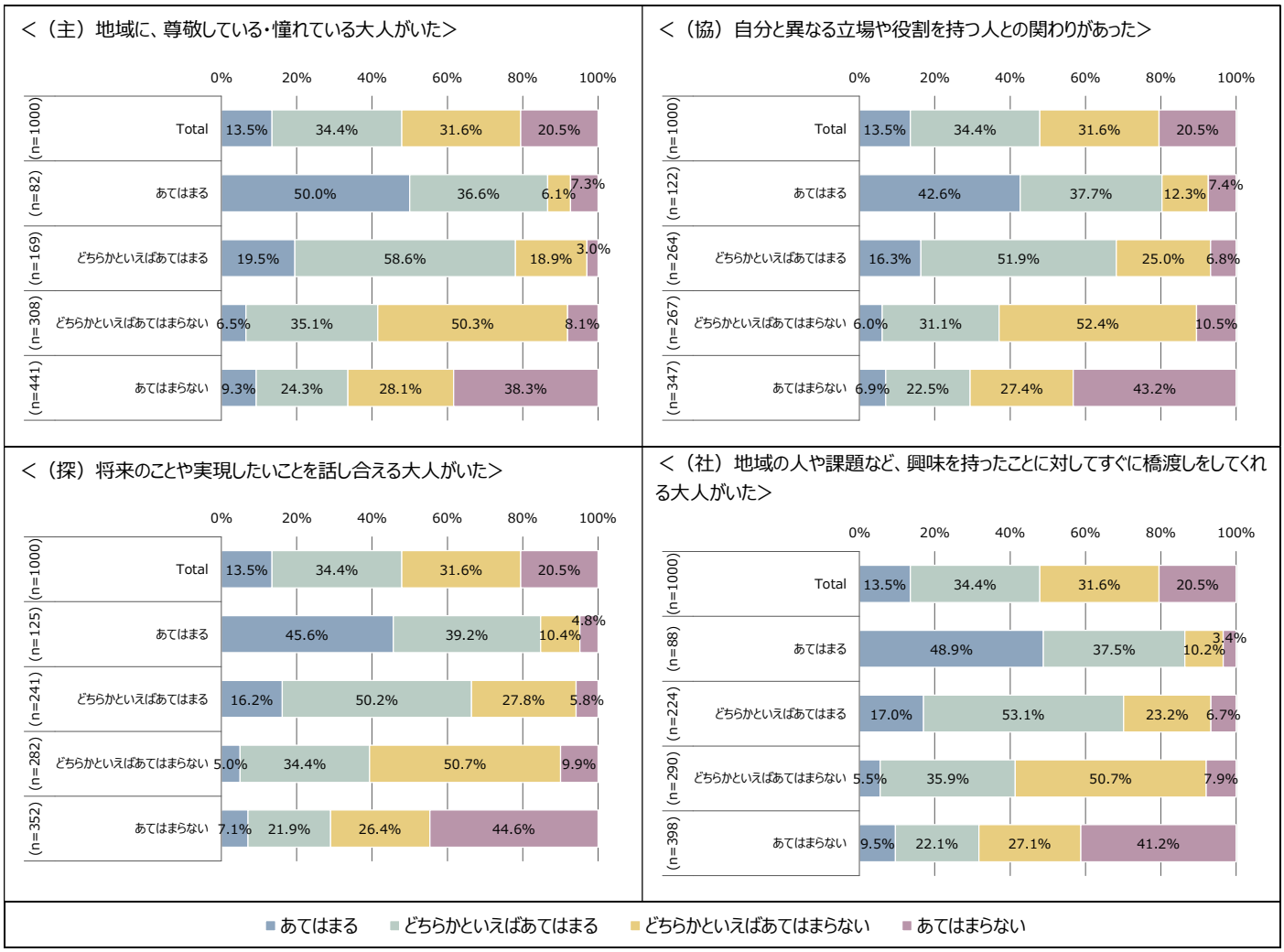
図表 13 および図表 14 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層ほど、「自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っている」についても肯定的な回答をしている。高校時代の学習活動・学習環境が豊かであるほど、将来の見通しについてもポジティブな意識を持っていることが分かった。

図表 13 「自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っている」×学習活動



※)各枠内の＜＞は分析軸とした質問で、よくした／時々した／あまりしなかった／ほとんどしなかったの 4 件法による回答となっている。本分析では、4 件法のそれぞれの回答者別に、「自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っている」(凡例は枠内下部)についての回答結果が見られるようになっている。なお、(主)=主体性に関する指標、(協)=協働性に関する指標、(探)=探究性に関する指標、(社)=社会性に関する指標。グラフの読み方は以降同様。

図表 14 「自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている」×学習環境



なお、同様の関係性が、以下の指標についても確認されている。

図表 15 同様の傾向が確認された関連指標（将来についての見通し）

・自分の将来に向けて、大切だと思うことを実行している（SA、4 件法）

②　高校卒業後の進学

高校時代の学習履歴が高校卒業後の進路選択にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容と、高校卒業後の進路選択に関する回答内容とのクロス集計を行った。

なお、高校卒業後の進路選択に関する記憶の新しい者の回答に絞り分析を行うため、分析対象を現在の社会的立場が「専門学校生」「短期大学生」「大学生」の者のみとした。

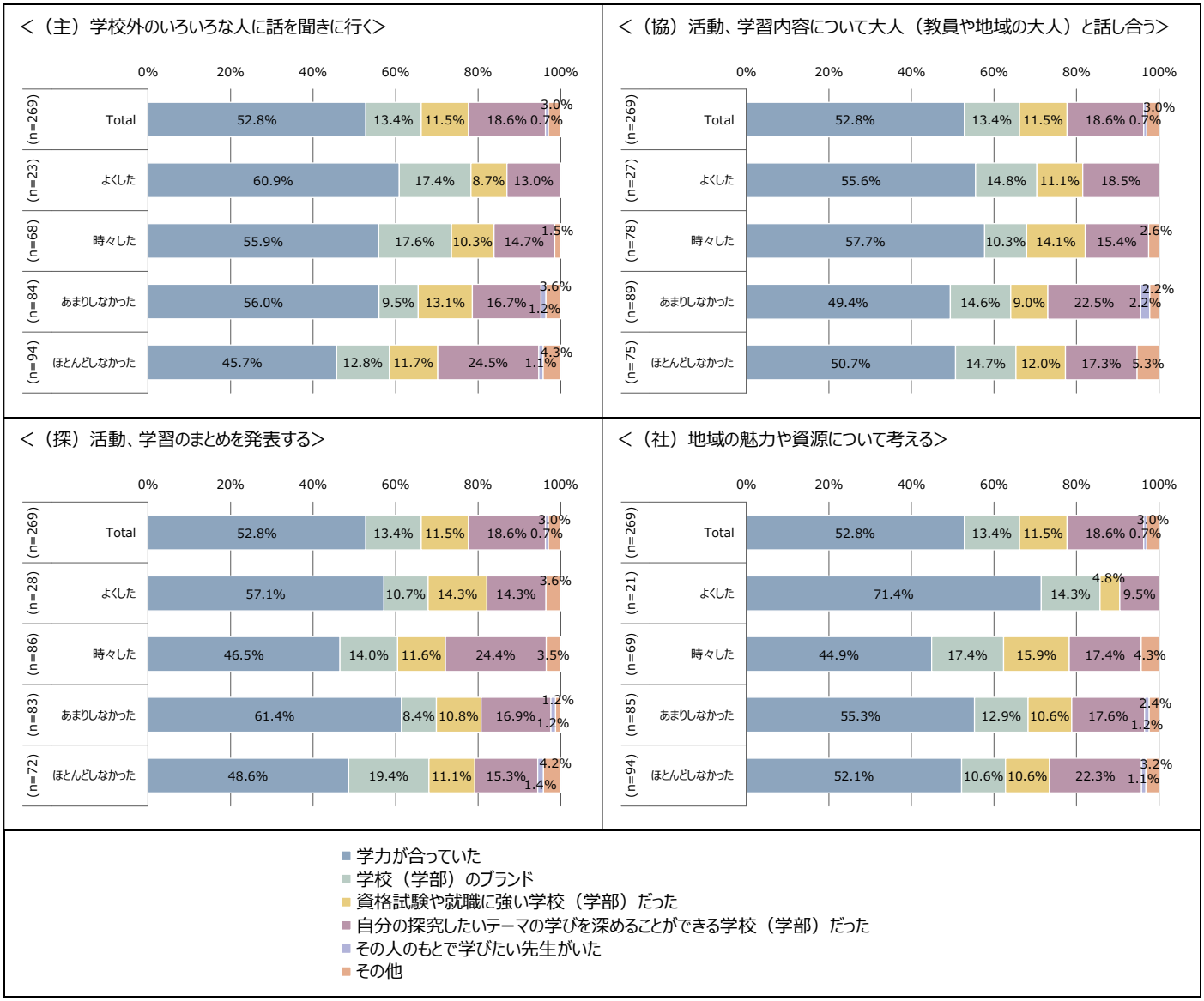
図表 16 クロス集計の内容（高校卒業後の進学）

分析対象：現在の進学先を選んだ理由（SA、最も近いものを選択）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境（SA、4 件法）※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる 4 つの指標を設定

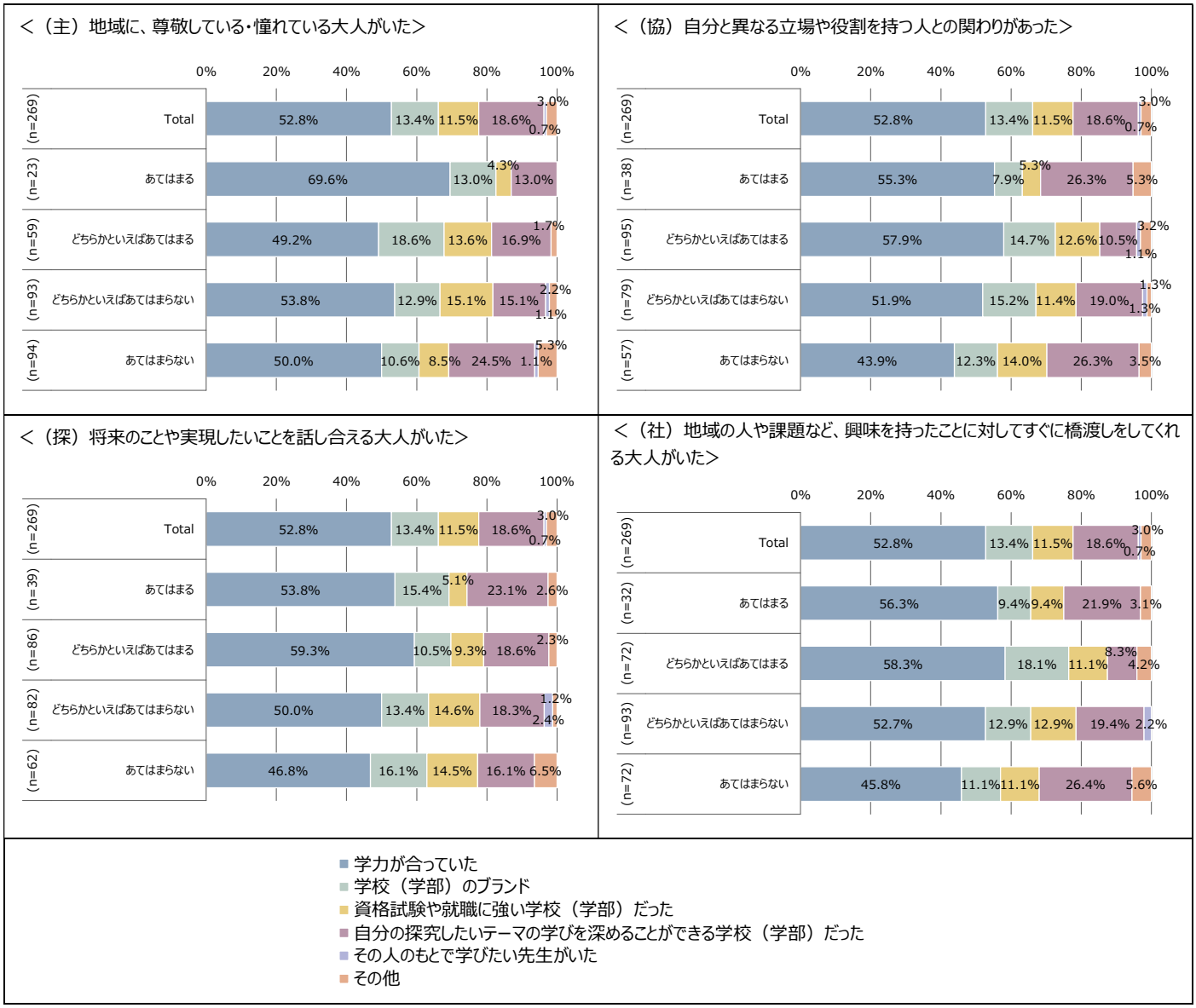
図表 17 および図表 18 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層であっても、現在の進学先を選んだ理由として「学力が合っていた」の回答割合が高く、「自分の探究したいテーマの学びを深めることができる学校（学部）だった」や「その人のもとで学びたい先生がいた」の回答割合はそれほど高まらない。

高校卒業後の進路選択については、依然として学力が合っていることが主要な判断軸とされていることが分かった。

図表 17 「現在の進学先を選んだ理由」×学習活動



図表 18 「現在の進学先を選んだ理由」×学習環境



③　高校卒業直後の職業選択

高校時代の学習履歴が高校卒業後の職業選択にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容と、高校卒業後の職業選択に関する回答内容とのクロス集計を行った。

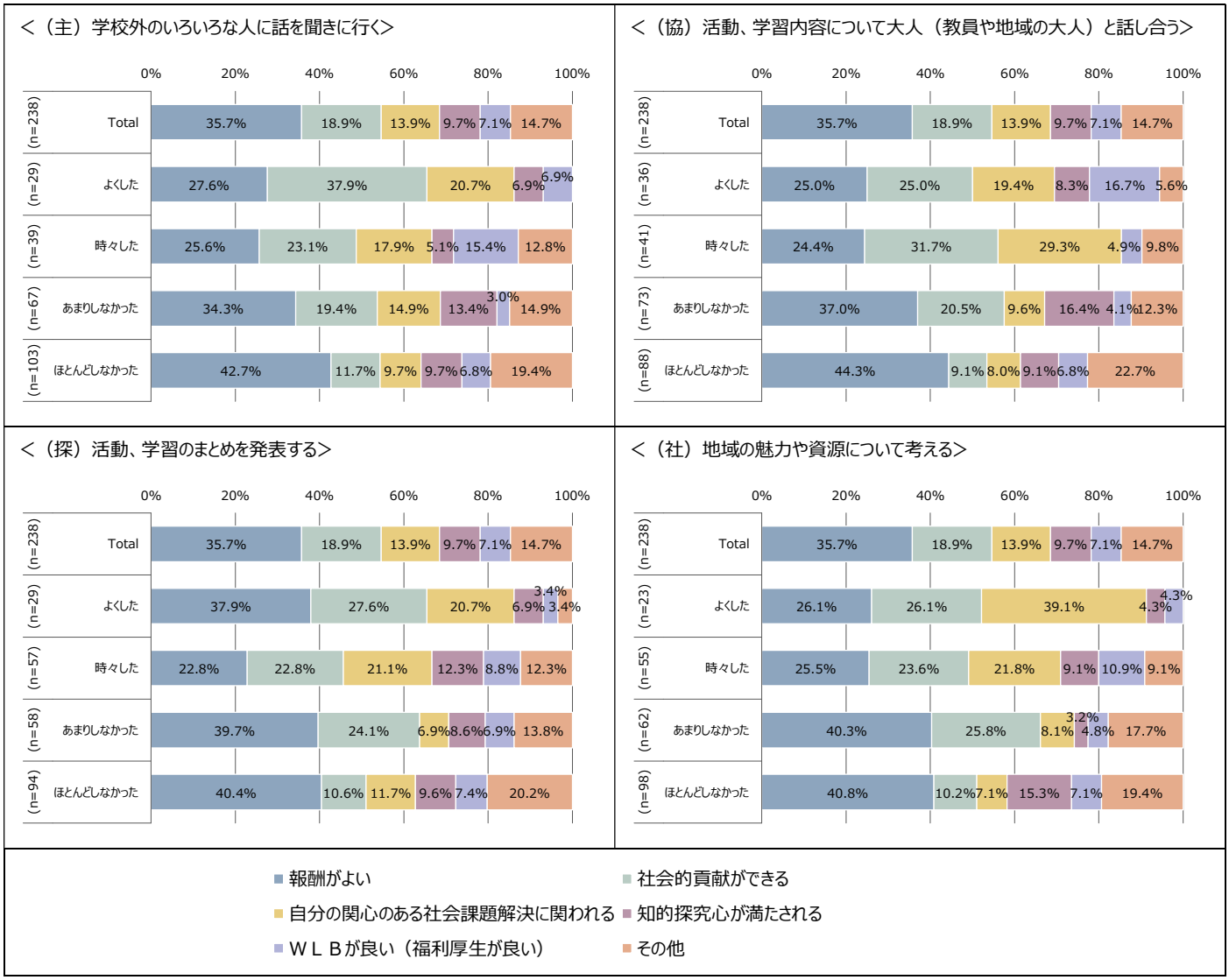
まず、高校卒業直後の進路選択について分析を行うため、分析対象を最終学歴が「高等学校」「高等専門学校（高専）」の者のみとした。

図表 19 クロス集計の内容（高校卒業直後の職業選択）

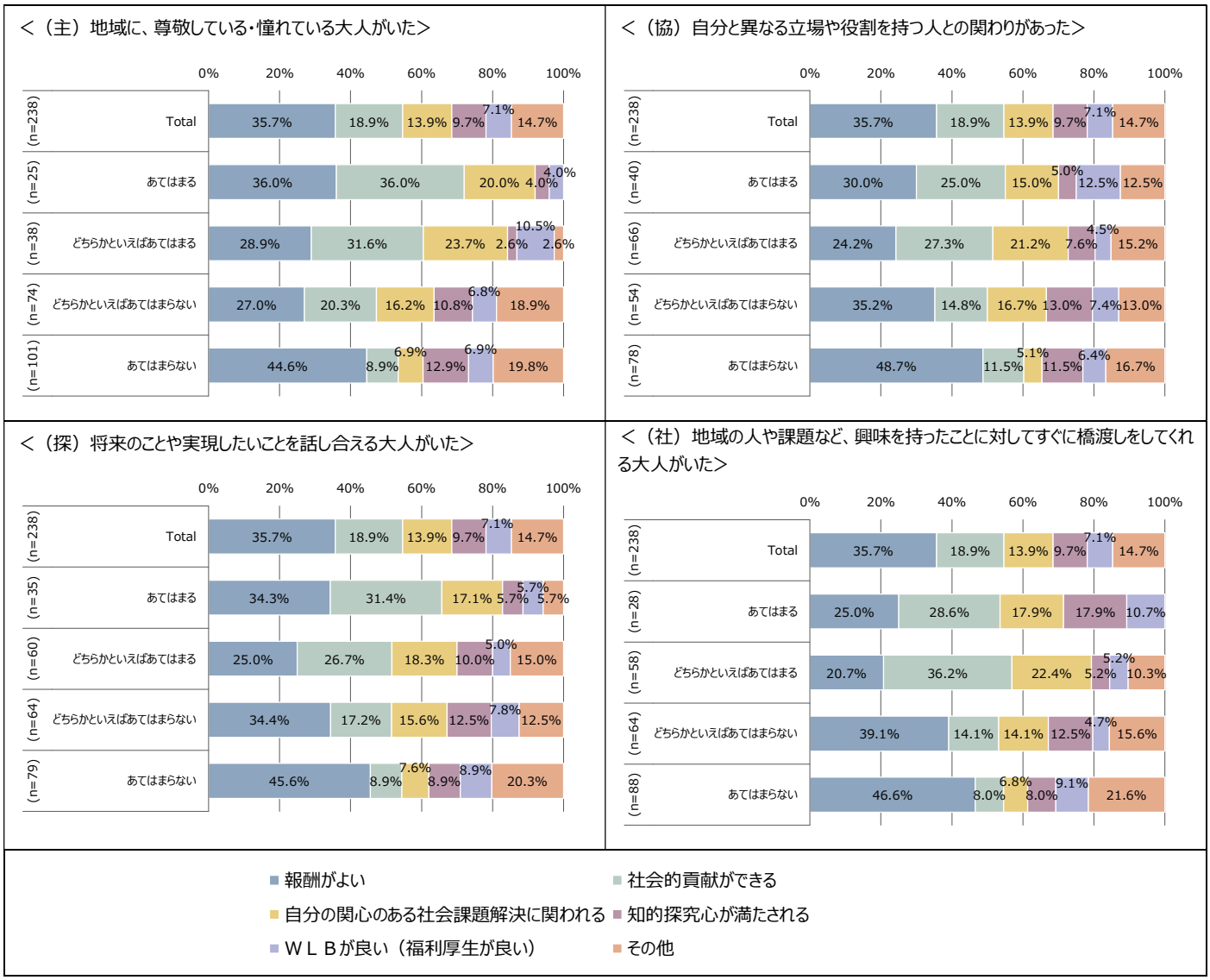
分析対象：現在の就職先を選んだ理由（SA、最も近いものを選択）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境（SA、4 件法）※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる 4 つの指標を設定

図表 20 および図表 21 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層ほど、「報酬がよい」の回答割合が下がり、「社会的貢献ができる」「自分の関心のある社会課題解決に関われる」の回答割合が高まる傾向があることが分かった。

図表 20 「現在の就職先を選んだ理由」×学習活動



図表 21 「現在の就職先を選んだ理由」×学習環境



④　高校卒業後、一度進学してからの職業選択

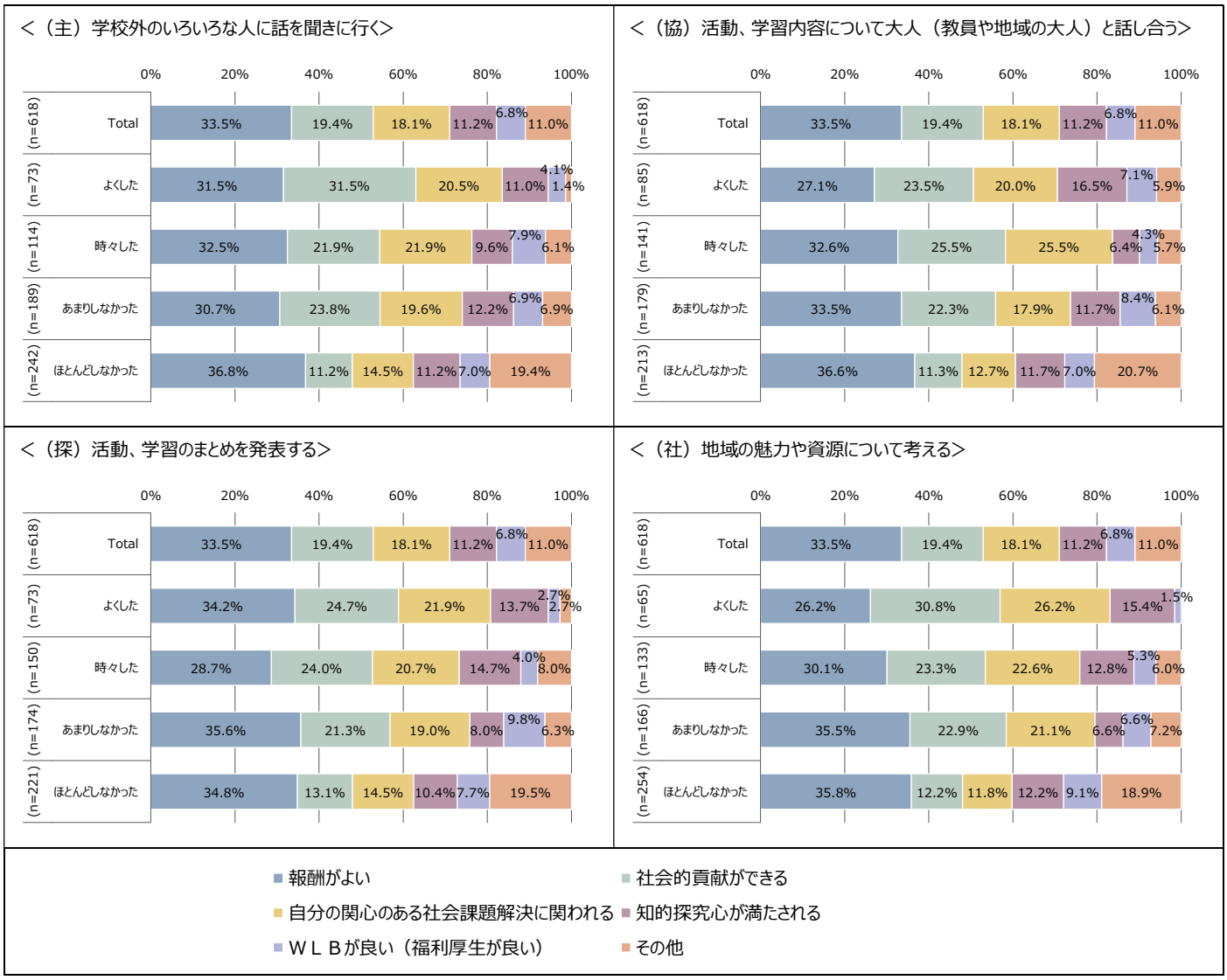
③と同様の分析を、対象者を変えて行った。高校卒業後一度進学してからの就職を行った者の、就職先を選んだ理由について分析を行うため、分析対象を最終学歴が「各種学校・専修学校」「短期大学」「大学」「大学院」「その他」の者のみとした。

図表 22　クロス集計の内容（高校卒業後、一度進学してからの職業選択）

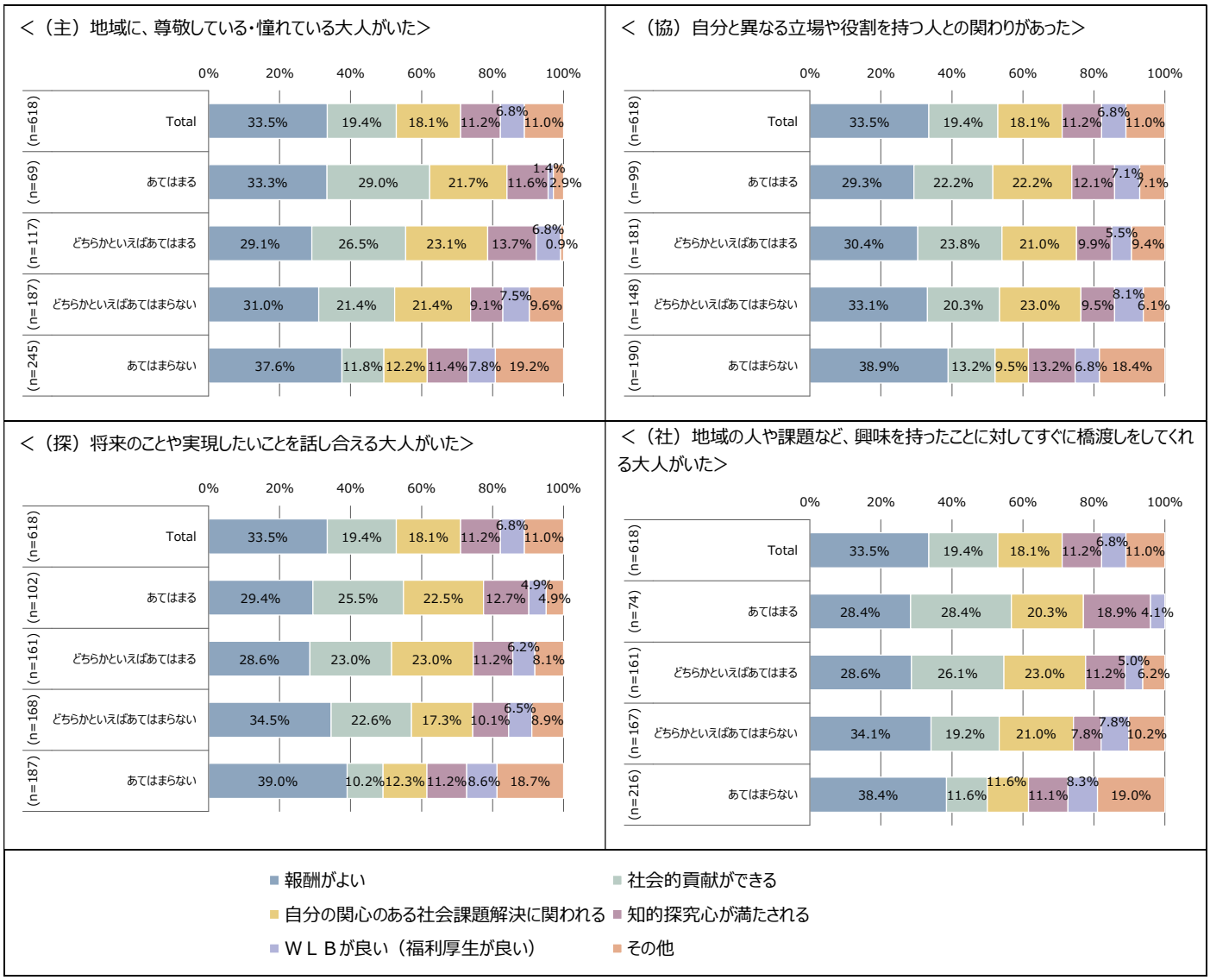
分析対象：現在の就職先を選んだ理由（SA、最も近いものを選択）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境（SA、4 件法）※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる 4 つの指標を設定

図表 23 および図表 24 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層ほど、同じように「社会的貢献ができる」「自分の関心のある社会課題解決に関われる」の回答割合が高まるものの、この傾向は高校卒業後すぐに就職した層の方が顕著であるように見受けられる。

図表 23 「現在の就職先を選んだ理由」×学習活動



図表 24 「現在の就職先を選んだ理由」×学習環境



（3）高校時代の活動等の地方創生効果（地域への意識等への波及効果）

①　地元に繋がり続けたいという意識

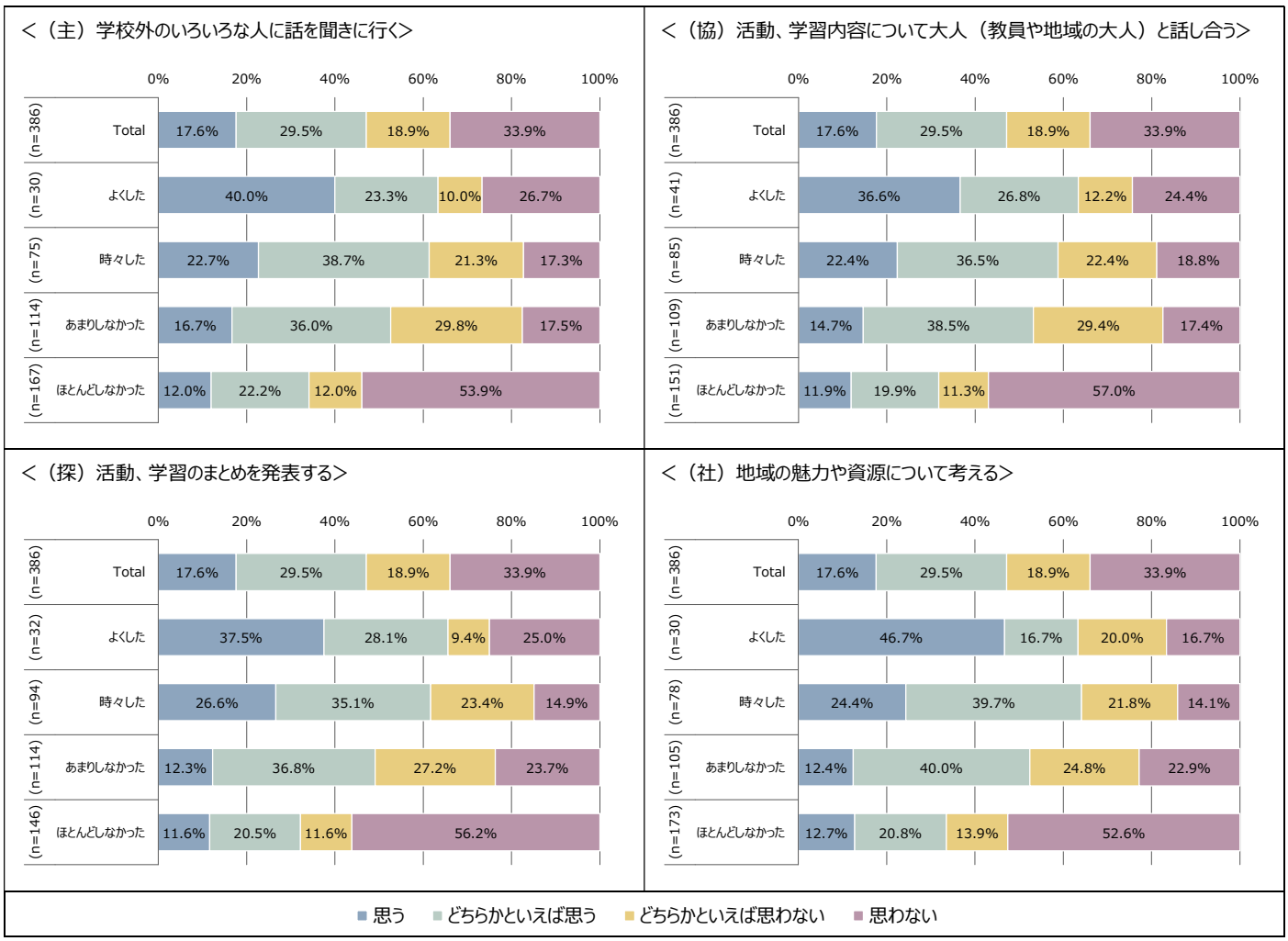
高校時代の学習履歴が高校卒業後の地元への意識にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容と、地元に繋がり続けたいかの回答内容とのクロス集計を行った。なお、質問内容の性質から、回答者は現在地元を離れて暮らしている者に限定した。

図表 25　クロス集計の内容（地元に繋がり続けたいという意識）

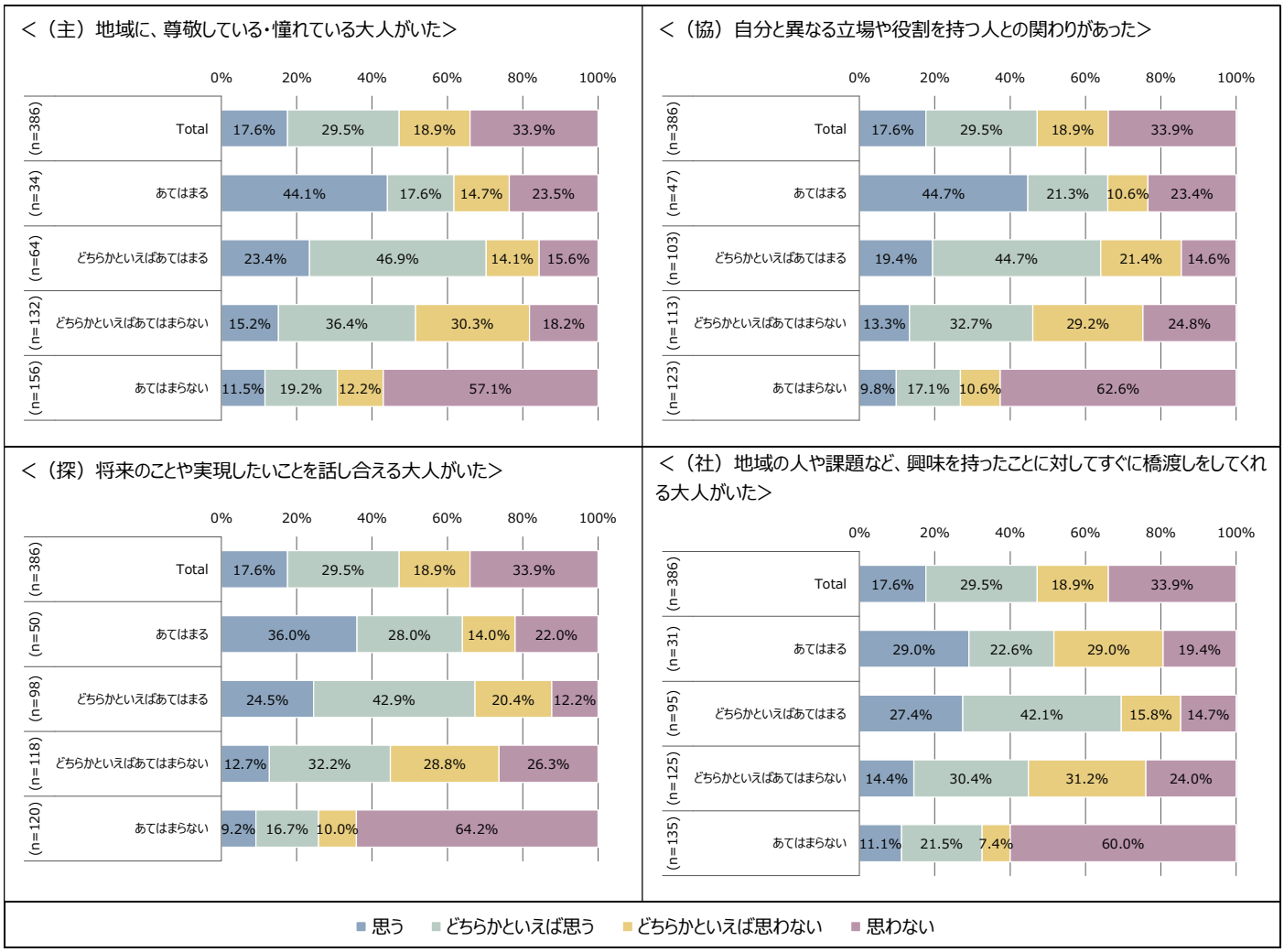
分析対象：将来、高校時代を過ごした地域に帰らなくても、何らかの形で繋がり続けたい（SA、4 件法）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境（SA、4 件法）※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる4つの指標を設定

図表 26 および図表 27 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層ほど「将来、高校時代を過ごした地域に帰らなくても、何らかの形で繋がり続けたい」に対しても肯定的な回答をしている。高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）が豊かであるほど、将来も関係人口として地元に関わり続けたいという割合が高くなっていることが分かった。

図表 26 「将来、高校時代を過ごした地域に帰らなくても、何らかの形で繋がり続けたい」×学習活動



図表 27 「将来、高校時代を過ごした地域に帰らなくても、何らかの形で繋がり続けたい」×学習環境



なお、同様の関係性が、以下の指標についても確認されている。「いずれは地元に帰りたい」「地元に何らかの形で貢献する仕事をしたい」といった意識面だけではなく、「今住んでいる地域でボランティア活動等に参加している」という実際の行動面にも影響があることが分かった。

図表 28 同様の傾向が確認された関連指標（地元に繋がり続けたいという意識）

- いずれは高校時代を過ごした地域で働きたい（SA、4 件法）
- 将来、高校時代を過ごした地域に帰らなくても、その地域に何らかの形で貢献するような仕事をしたい（SA、4 件法）
- 今住んでいる地域で、地域行事やボランティア活動等に参加している（SA、4 件法）

②　帰省回数

高校時代の経験が高校卒業後の帰省回数にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容の一部と、帰省回数とのクロス集計を行った。なお、質問内容の性質から、回答者は現在地元を離れて暮らしている者に限定した。

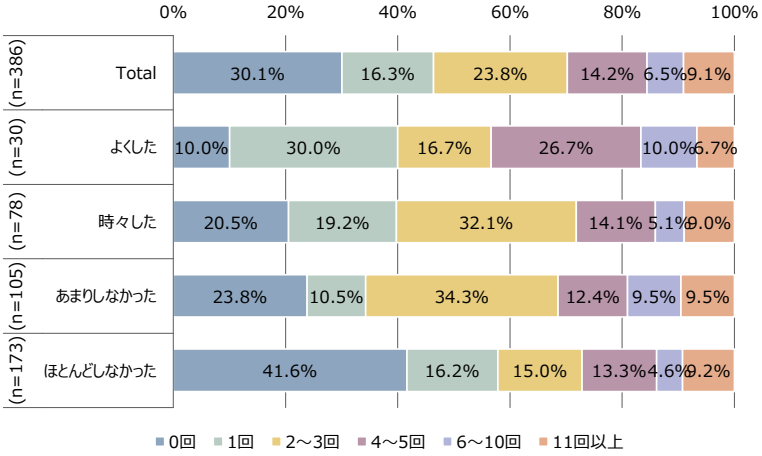
図表 29　クロス集計の内容（帰省回数）

分析対象：帰省回数（NA）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境のうち、特に関連があると思われる2指標（SA、4 件法）

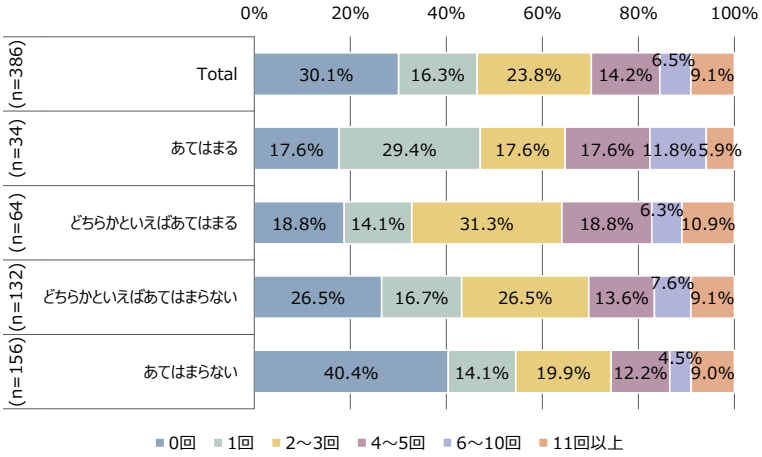
図表 30 からは、高校時代に「地域の魅力や資源について考える」ことがよくあった層ほど、地元への帰省回数が多い傾向がみられる。また、図表 31 からも、高校時代に「地域に、尊敬している・憧れている大人がいた」層ほど、地元への帰省回数が多い傾向が見られる。

回答者の地元と現在の居住地の地理的関係にも左右される項目ではあるものの、全体傾向として、高校時代に地域資源や地域の大人に触れる機会が多かった若者は、卒業後も地元に愛着を持っているといった関係性が読み取れた。

図表 30　帰省回数×「地域の魅力や資源について考える」



図表 31　帰省回数×「地域に、尊敬している・憧れている大人がいた」



※）表側の「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の回答内容を比較すると、「どちらかといえばあてはまる」の方が帰省回数が多いようにも読み取れるが、全体としてみると、肯定的な回答をしている者の帰省回数が多い傾向があると読み取った。

③　地元に関する行動

高校時代の経験が高校卒業後の地元に関する行動にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容の一部と、直近地元に関して行ったことの回答内容とのクロス集計を行った。なお、質問内容の性質から、回答者は現在地元を離れて暮らしている者に限定した。

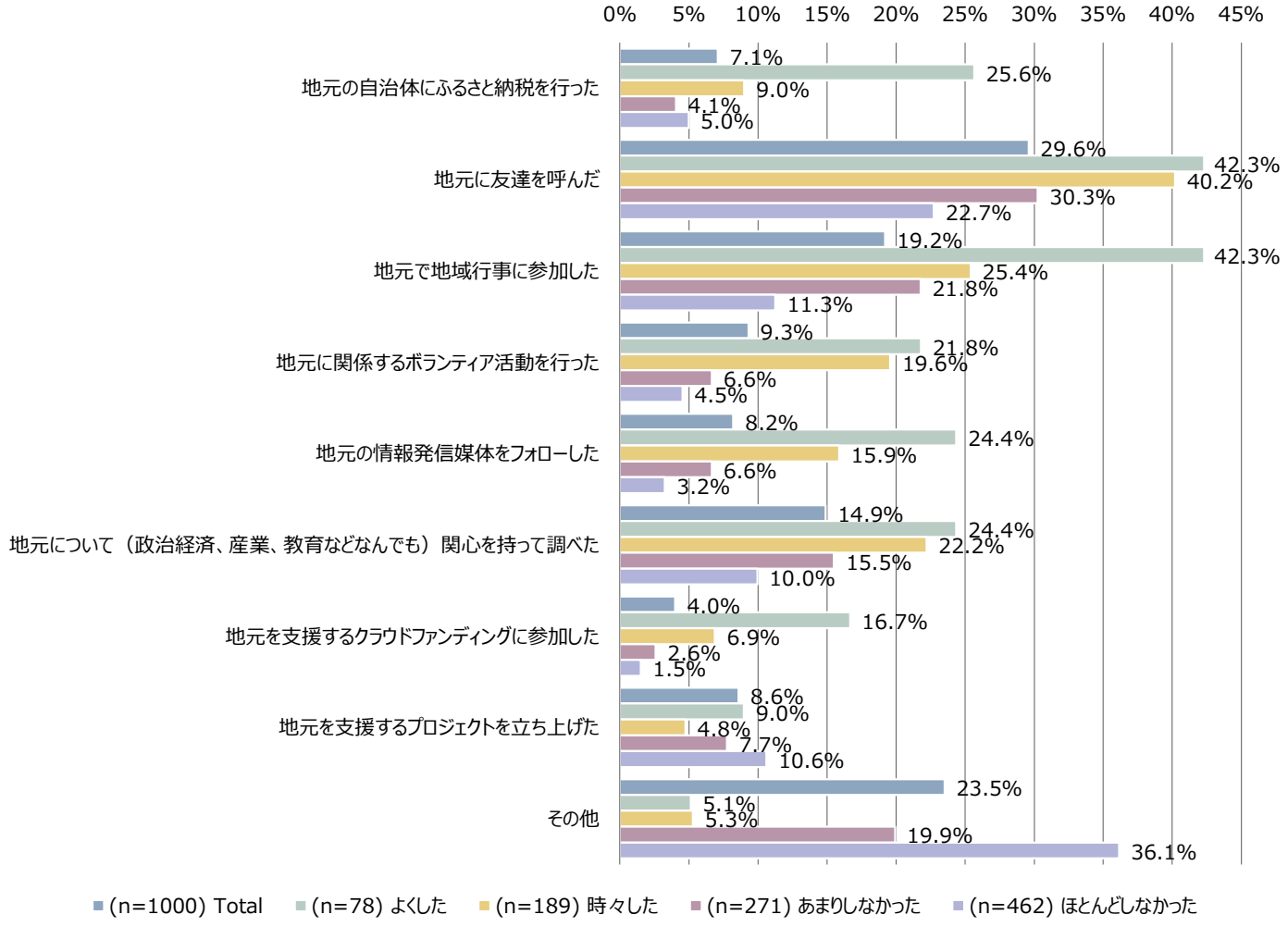
図表 32　クロス集計の内容（地元に関する行動）

分析対象：直近 1～2 年で地元に関して行ったこと（MA）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境のうち、特に関連があると思われる 2 指標（SA、4 件法）

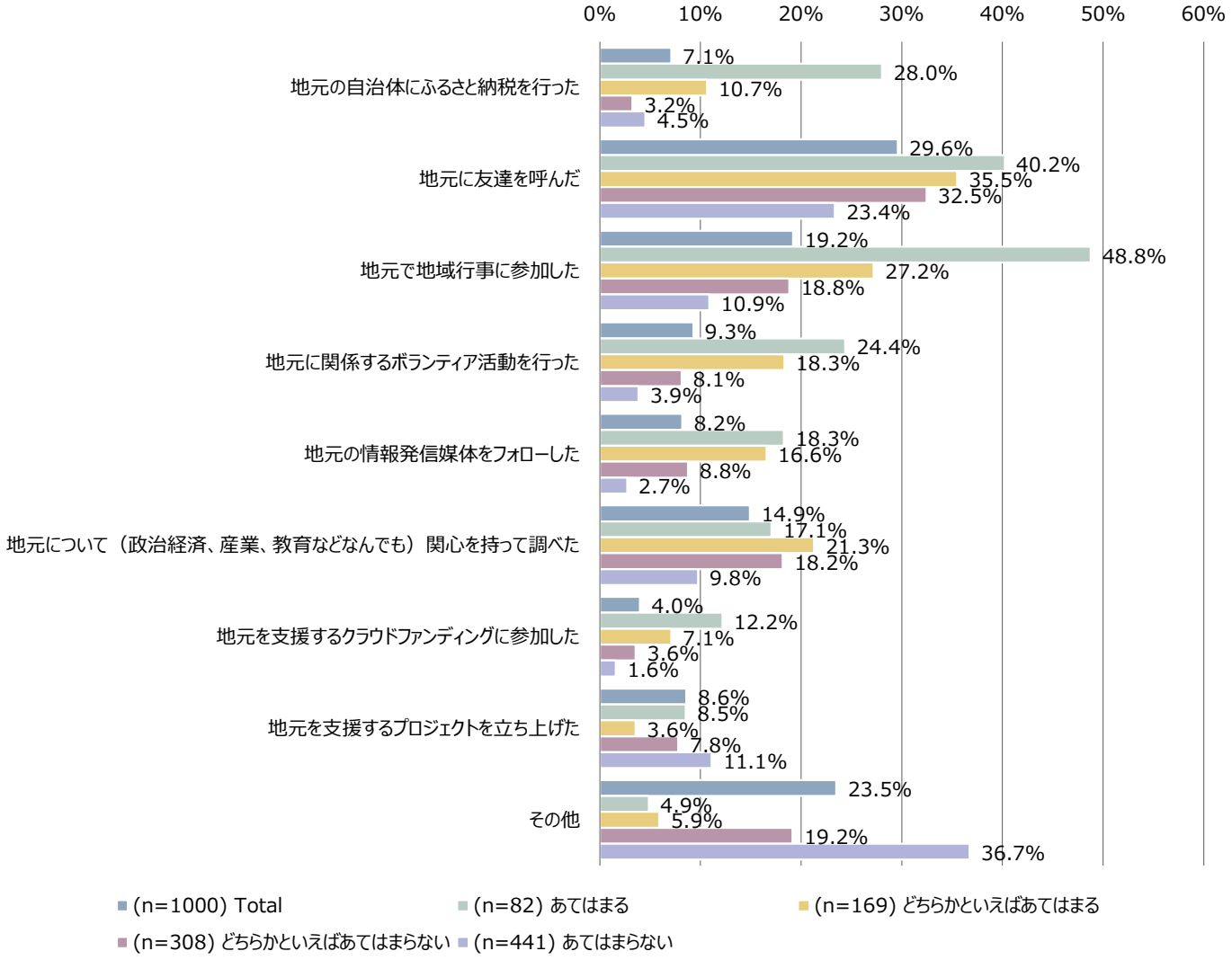
図表 33 からは、高校時代に「地域の魅力や資源について考える」ことがよくあった層（「よくした」「時々した」）ほど、地元に関する行動の各指標の回答割合が高いことが分かる。また、図表 31 をみると、高校時代に「地域に、尊敬している・憧れている大人がいた」に肯定的に回答している層（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」）ほど、同様に地元に関する行動の各指標の回答割合が高い。

高校時代に地域資源や地域の大人に触れる機会が多かった若者は、卒業後もふるさと納税や地元での地域行事参加など、行動面でも地元に関わり続ける傾向があることが分かる。

図表 33 「直近 1～2 年で地元に関して行ったこと」×「地域の魅力や資源について考える」



図表 34 「直近 1～2 年で地元に関して行ったこと」×「地域に、尊敬している・憧れている大人がいた」



（4）高校時代の活動等の卒業後の資質・能力への波及効果

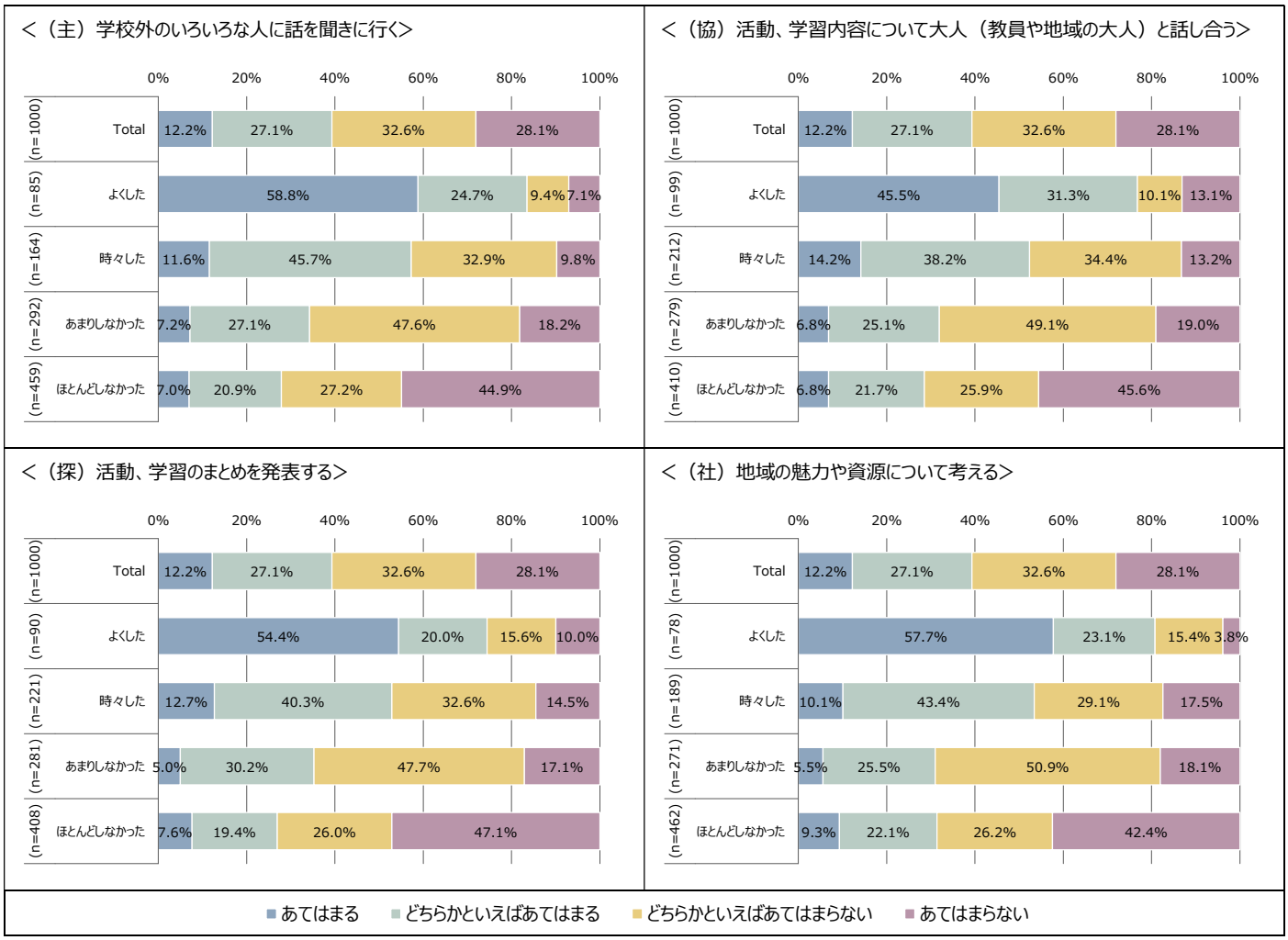
高校時代の学習履歴が卒業後の資質・能力にどのように影響を及ぼしているかを分析するため、高校時代の学習活動・学習環境（学びの土壌）に関する回答内容と、高校を卒業した若者の現在の資質・能力認識に関する回答内容とのクロス集計を行った。

図表 35 クロス集計の内容（資質・能力：自己肯定感）

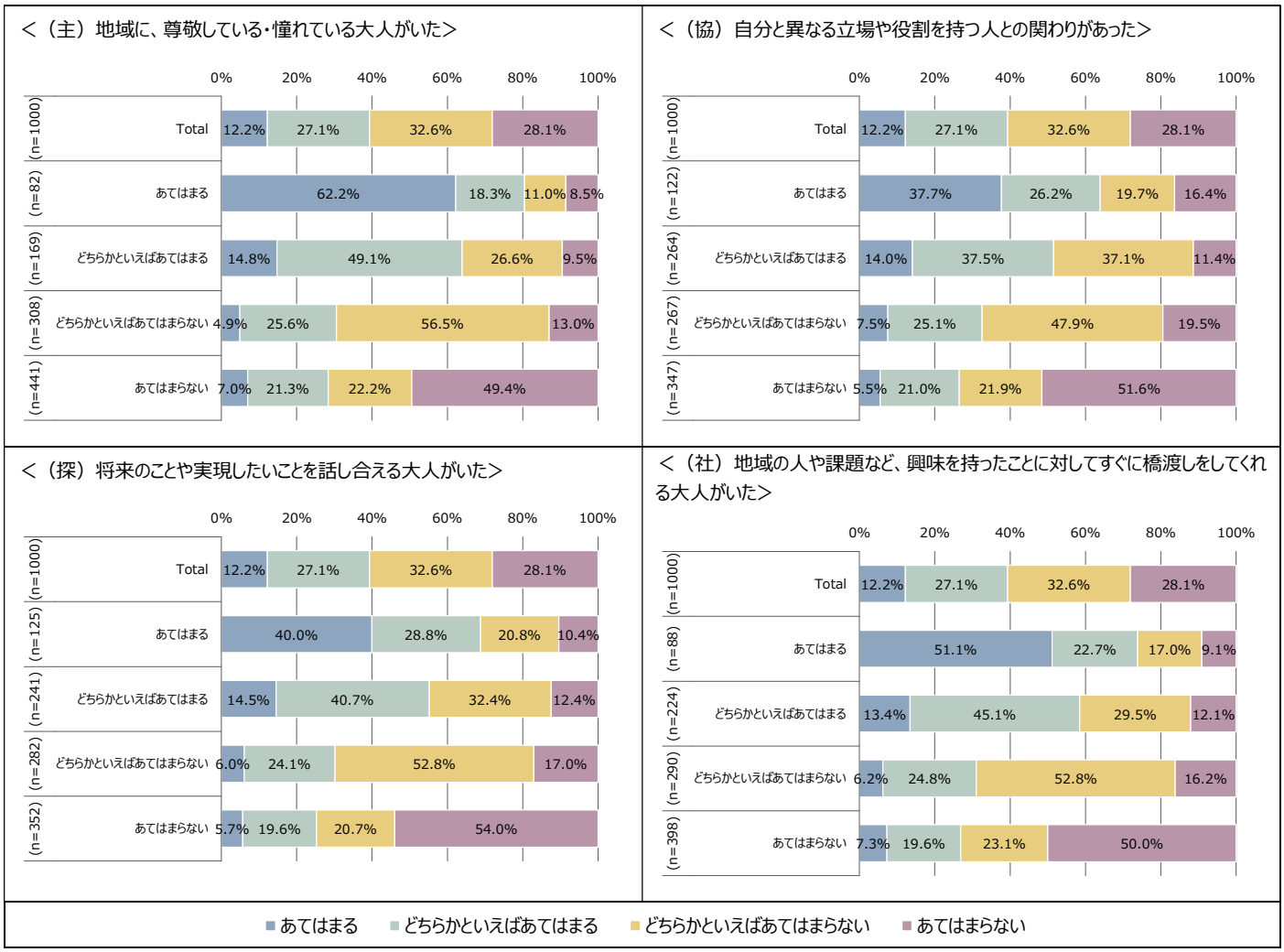
分析対象：私は、自分自身に満足している（SA、4 件法）
分析軸：高校時代の学習活動・学習環境（SA、4 件法）※それぞれ主体性・協働性・探究性・社会性に関わる 4 つの指標を設定

図表 36 および図表 37 をみると、それぞれの学習活動・学習環境について「よくした」あるいは「あてはまる」と回答した層ほど、「私は、自分自身に満足している」についても肯定的な回答をしている。高校時代の学習活動・学習環境が豊かであるほど、現在の自己認識（自己肯定感）についてもポジティブな意識を持っていることが分かった。

図表 36 「私は、自分自身に満足している」×「学習活動」



図表 37 「私は、自分自身に満足している」×「学習環境」



なお、同様の関係性が、以下の指標についても確認されている。自己肯定感だけではなく、主体性・協働性・探究性・社会性に関する資質・能力認識においても、ポジティブな関係性があることが分かった。

図表 38 同様の傾向が確認された関連指標（地元に繋がり続けたいという意識）

- 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることが出来る（主体性に関する自己認識）（SA、4 件法）
- 自分とは異なる意見や価値を尊重することが出来る（協働性に関する自己認識）（SA、4 件法）
- 学習を通じて、自分ができることやしたいことが増えている（探究性に関する自己認識）（SA、4 件法）
- 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい（社会性に関する自己認識）（SA、4 件法）
- 地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がある（社会性に関する自己認識）（SA、4 件法）

4.　（参考）島根県調査との比較

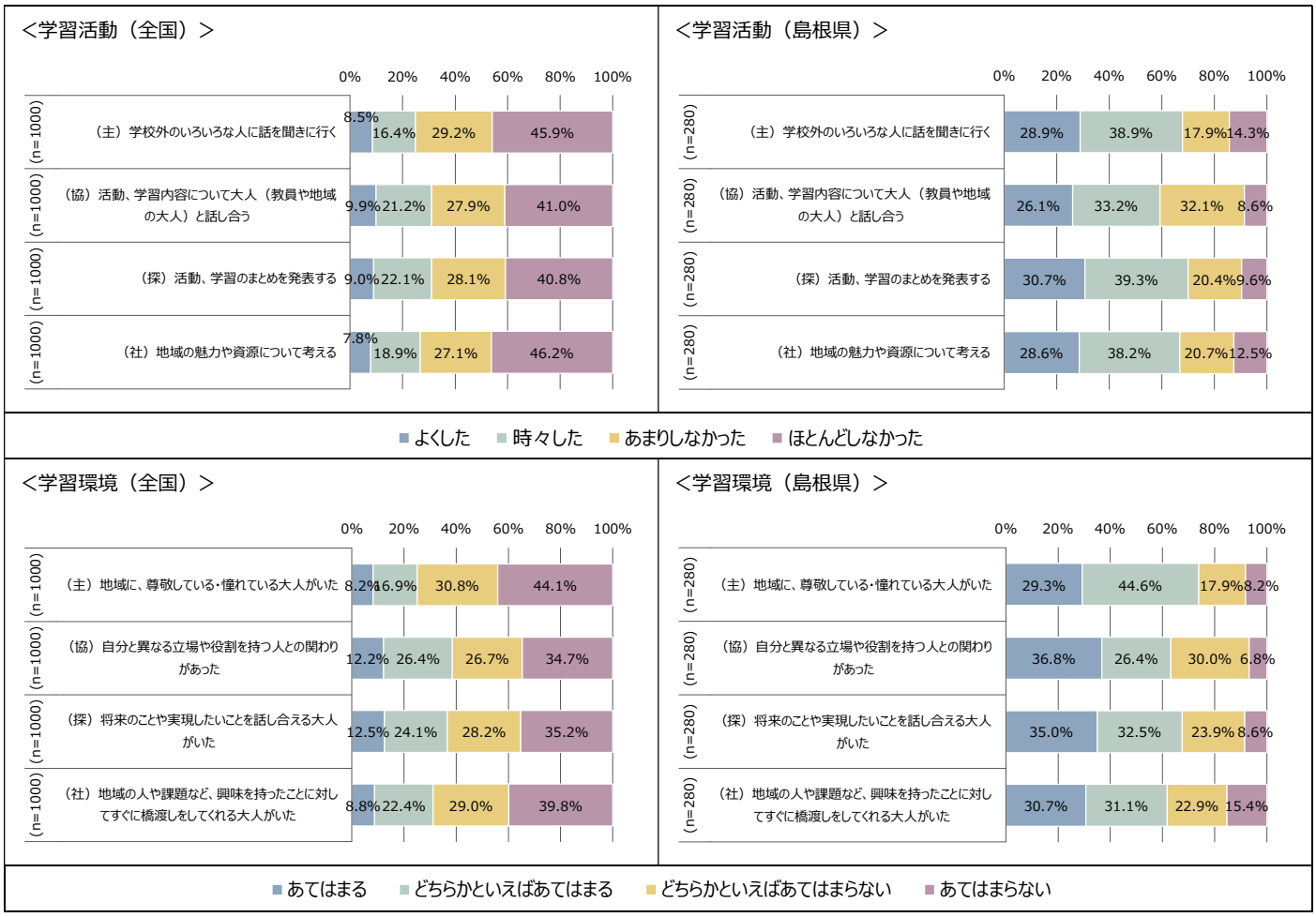
最後に、同様の質問項目にて島根県内で実施した卒業生調査との結果の比較を紹介する。島根県では全国に先駆けて高校魅力化に関する取り組みを進めており、以降で紹介する全国調査と島根県調査の比較からも、島根県における取り組みの成果が伺えるところである。

ただし、島根県調査の回答者は、県の卒業生ネットワークに登録をしている学生や SNS をフォローしている学生など、何らかの形ですでに島根県との繋がりを持っている学生となっている。今回の全国調査の対象者であるネットモニターと比較すると、元から地域への意識・愛着等が高い母集団であると言える。この点には留意の上、以降の結果をご覧いただきたい。

①　学習活動・学習環境の比較

高校時代に以下のような学習活動や学習環境（学びの土壌）があったかについての回答結果をみると、島根県では「よくした」「時々した」（学習活動）および「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」（学習環境）の回答割合が、全国と比較して非常に高いことが分かる。

図表 39　学習活動・学習環境の比較（SA、4 件法）

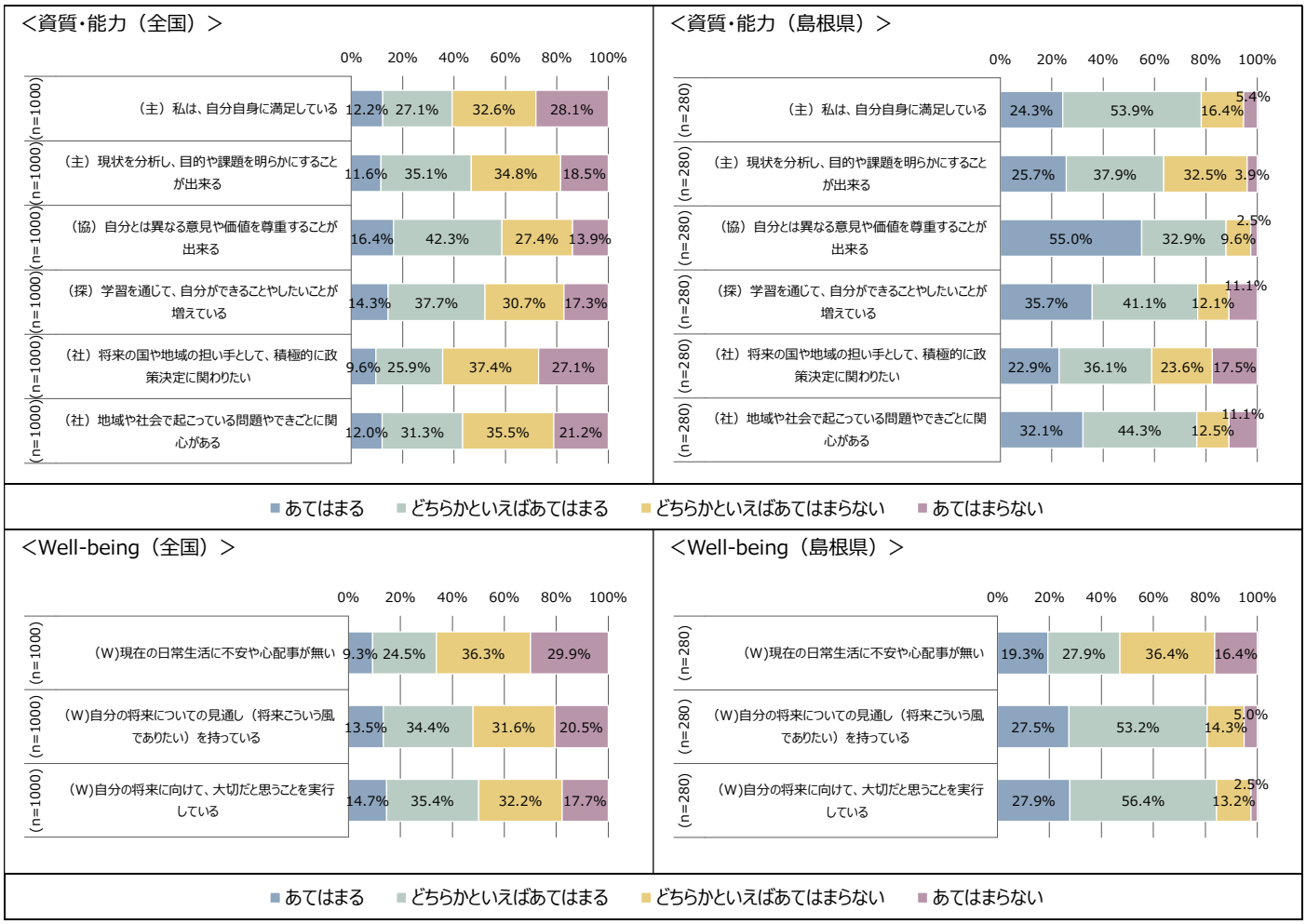


②　資質・能力と Well-being の比較

高校を卒業した若者の現在の資質・能力認識や Well-being に関する意識の回答結果をみると、島根県では「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と肯定的に回答する割合が、全国と比較して高い。高校時代の学習活動や学習環境の豊かさが、卒業後の資質・能力認識や Well-being の高さと関連していると考えられる※。

※）在学中の学習活動・学習環境と在学中の資質・能力認識、Well-being 認識については、これまでも関係性が検証されている（2 ページに記載の当社政策研究レポート②を参照）。

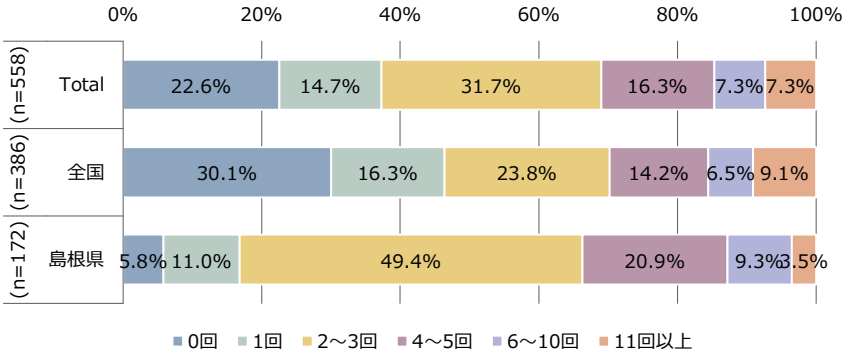
図表 40　資質・能力と Well-being の比較（SA、4 件法）



③　帰省回数の比較

現在地元を離れている者の帰省回数についても、全国と島根県での比較を行ったところ、島根県の方が回数が多い。

図表 41　帰省回数の比較（NA）



ー ご利用に際して ー

- 本資料は、執筆時点で信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客さまの決定、行為、およびその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客さまご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡ください。